九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近代移行期における日本産人参の輸出と中国市場 : 19世紀～20世紀初頭を中心に

童, 德琴

https://hdl.handle.net/2324/1806776

出版情報：九州大学, 2016, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	童　徳琴
論　文　名	近代移行期における日本産人参の輸出と中国市場 ――19 世紀～20 世紀初頭を中心に――
論文調査委員	主　査　　九州大学　　准教授　　中島　楽章 副　査　　九州大学　　教授　　高木　彰彦 副　査　　九州大学　　准教授　　岩﨑　義則 副　査　　山口大学　　准教授　　滝野　正二郎

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、19 世紀～20 世紀初頭における日本産の薬用人参（以下、人参と称する）の対中輸出動向を、日本・中国・欧米の史料と研究論文をひろく検討し、近代移行期における伝統的薬種生産の輸出産業化のプロセスを、総合的に論じたものである。

幕末から明治期にかけて、日本産人参は中国への主要輸出品の一つであったが、従来の日中貿易史研究では本格的な検討がなされていない。一方、医薬史研究においては、人参産業史研究の一環として、その対中輸出についても論及されているが、もっぱら日本側史料に止まり、中国における人参市場や各国産人参の対中輸出の動向も視野に入れた、包括的な考察は行われていない。本論文では、各国語史料・文献を活用し、日本産人参の対中輸出を、近代移行期の東アジアにおける薬種貿易の全体状況のなかで検討を加えている。

まず序論では、人参を中心とした薬種の生産・流通・貿易に関する研究史を網羅的に整理し、本論文の課題を明示している。第一章では、清朝による厳格な人参の生産・流通統制により、中国市場では人参需要に対する供給不足が深刻化し、その代替商品として、朝鮮産・北米産・日本産人参の対中輸出が増大したことを論じた。第二章では、日本における人参生産が、18 世紀初頭に輸入代替製品として始まったが、18 世紀末には逆に中国に輸出されるようになり、アヘン戦争後には北米産人参の対中輸出量減少に応じて、輸出量を増大させたことを示した。

第三章では、明治前半期（1968～1886）における日本産人参の対中輸出動向を、日本政府の殖産興業政策や人参生産の産業化過程と関連して分析し、明治初年には輸出産業としての人参生産が大きく発展したが、明治中期には人参の過剰生産や人参製造会社の乱立が、日本産人参の品質低下や輸出急減を招いたことを論証した。さらに第四章では、明治後半期（1887～1912）において、日本における人参の生産体制の整備や、中国産・北米産人参の供給量減少などにより、日本産人参は一時中国市場において最大のシェアを占めるに至り、その後輸出量は減少したが、近代的農学・薬学の導入による高品質化により、主要輸出産業として確立したことを明らかにした。

以上のように、本論文では日本・中国・欧米の史料・文献を広範に活用し、従来もっぱら日本における生産史の文脈で論じられていた日本産人参の輸出動向を、東アジア全域の薬種流通やグローバルな貿易動向のなかに位置づけている。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つ者であると認める。